Vol. 66
2024.12
山形市立病院済生館
診ます会 News Letter

魅力のある臨床研修病院を目指して

副館長
黒木 実智雄

日頃より診ます会会員の先生方には大変お世話になっております。令和6年4月より副館長を拝命いたしました。いくつかのミッションを命じられておりますが、自身が卒後3年間済生館で研修させていただいたこともあり、以前から携わっている臨床研修センターについては、特に思い入れの強い任務となっています。平成16年の新医師臨床研修制度が制定される以前より、山形県内の病院のなかでも済生館は大変多くの研修医を受け入れてきました。済生館の若手医師受け入れの歴史は古く、その背景には明治時代に医学校が併設されていた歴史も少なからず関与しているのかもしれません。しかし、近年済生館に対する医学生の評判は芳しくなく、研修医の数も減ってまいりました。「多くの症例を経験できる」、「忙しい病院で力がつくよ」（実際にそうではあるのですが…）というだけでは魅力を感じてはもらえません。以前、ある研修医から切実な不満の言葉も聞かれました。職人の世界（今は違うかもしれませんが）と同じで、先輩の技術を盗み見て、試行錯誤を繰り返しながら習得し、日夜関係なくただ愚直に働くことが当然とされてきた時代からの変化に済生館は乗り遅れてしまったのだと痛感しました。再び研修医が集まる病院を目指して病院全体で取り組んできました。ここ数年で、優秀な指導医も集まってきましたし、研修医の指導に対しても改善がみられ、済生館は確実に変わってきたことを実感いたします。春には10名の研修医が来てくれる予定となっています（定員10名、いわゆるフルマッチ）。済生館は忙しい臨床研修病院として知れ渡っていますが、なんとか魅力のある病院を目指して、微力ながら力を注いでいきたいと考えております。研修医の存在は病院を明るくし、活気をもたらしてくれます。

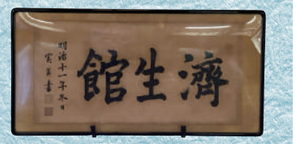
診ます会の先生方から御紹介いただく症例は、研修医の教育においても大変貴重です。これからも責任をもって、しっかりと診させていただきます。2031年の新病院完成に向けて、魅力のある臨床研修病院を目指してさらに精進して参る所存ですので、診ます会の先生方のお力添えをどうかよろしくお願いいたします。

済生館150年の歩み

済生館病院事業管理者
貞弘　光章

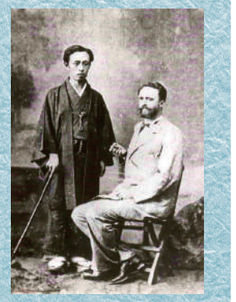
明治７年
「山形県立公立病院」開院式

明治 11 年
「三層楼」完成
「済生館」命名

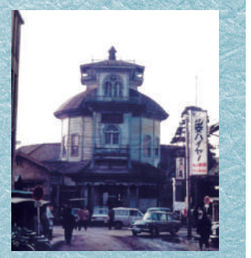


明治 13 年
ローレツ医師、医学校教頭就任

明治 14 年
明治天皇
御代巡行幸



昭和20年
「三層楼」
尖塔撤去



昭和41年
中央病棟完成
全病棟移転完了

記録的な猛暑の夏を忘れてしまいそうに寒さがひとしお身にしみる季節となりましたが、診ます会の先生方におかれましては、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。常々格別の御高配と御支援を賜り心より感謝申し上げます。

さて、今年は山形市立病院済生館の創立 150 周年にあたる節目の１年でございました。済生館は、明治７年に山形県公立病院としての開設、その後、明治 11 年９月には初代山形県令 三島通庸によって建築が着工された三層楼（現在の山形市郷土館、国指定重要文化財）が完成し、同年 12 月に当時の太政大臣である三条実美より「済生館」と命名されました。また、明治 13 年には医学講義のためオーストリア医師のローレツ博士を済生館医学校教頭兼館医として招請、翌 14 年には明治天皇御代巡行幸など、輝かしい明治時代の創生期から幕を開けました。

昭和期に入り、戦中には三層楼が空襲の標的となる懸念から二階建てに改築されました。戦後においては合併による市域面積の拡大や人口の集中等による医療体制の更なる充実を求められたため、昭和 39 年より近代的な医療施設としての改築に着手、昭和 41 年２月には中央病棟が完成し、全病棟の移転が完了いたしました。

平成元年
現済生館工事着工

平成6年
現済生館落成式挙行

平成14年
病診連携協力会「診ます会」発足

平成15年
「地域医療支援病院」承認

平成18年
「電子カルテシステム」稼働

〜

令和6年10月3日
創立150周年記念式典開催

平成元年には現済生館建設工事が着工され、平成６年に全工事が完了、10 月には落成式が挙行されました。平成 14 年には現在の病診連携の礎である済生館病診連携協力会「診ます会」を発足、その後、県内初の地域医療支援病院の指定、電子カルテの導入など、地域における中核的な医療機関として、先進的な取り組みをいち早く取り入れ、一貫してこの七日町の地で地域住民の方々の御支援と御協力を頂戴しながら、医療を提供して参りました。この 150 年の歴史と先人達の努力に敬意を表しつつ、「健康医療先進都市の拠点病院」そして「地域から愛され信頼される病院」として皆様のご協力を得ながら、新たな課題へも引き続き尽力して参ります。

また、今年 10 月３日には「済生館創立 150 周年記念式典」が挙行され、山形市長や市議会関連、各医療機関代表者、診ます会幹事の方々、約 150 名の皆様よりご臨席を賜りました。県知事や市議会議長、山形大学医学部長、東北大学医学部長からご祝辞をいただき、その後には、歴史研究家、元山形市郷土館運営協議会会長の 小形利彦 氏から「原点を振り返る−草創期の済生館−」、次に、全国自治体病院協議会会長の 望月 泉 氏から「地域に必要とされる、地域になくてはならない自治体病院になろう」と題した記念講演を頂戴いたしました。特に、小形氏の講演では済生館創立時における三島通庸県令の貢献、ローレツ博士の招聘、イザベラ・バード女史の旅行記、時の長谷川元良院長が太政大臣三条実美に病院の命名を依頼して「済生館」と決定、明治 12 年１月に市民待望の新病院開院式が盛大に行われた事など、当時が偲ばれる数々の写真を交えてのご講演を賜り、参列者一同、済生館の歴史の重さを再認識いたしました。

10 月から済生館の外来受付ホールにて「済生館設立 150 年のパネル展」も開催しております。年表とともに歴史的な写真をパネルとして掲載しておりますので、お時間が許せば是非ご覧いただければ幸いです。

職員一同、この歴史と伝統を心にして、良質な医療の提供を行ってまいりますので、診ます会の先生方には、引き続き済生館をご支援頂きますよう宜しくお願い申し上げます。

～地域のために安心を～

円滑な救急診療を目指して

済生館の救急室

TEAM Report

写真左から 屋代副室長
高橋主査看護師（救急看護認定看護師）
柴田副看護部長 久下室長

救急室 室長
久下 淳史

TEAM REPORT+ 済生館の救急室

診ます会の諸先生方には、日頃大変お世話になりありがとうございます。

近年、救急医療は逼迫しており、ここ村山地域における救急出動件数も増加傾向を示しています。そのような中でも我々は適切な救急医療を提供するべく種々の取り組みを行なっております。

当院の令和5年度救急室受診者数は13,117件、うち救急搬送5,797件（入院2,838件49%）でした。これら多くの患者さんの円滑な初期診療を行うために、Walk in患者に対してはトリアージナースによる緊急度・重症度による治療優先度を鑑みたトリアージを行い診療に役立てています。また、救急搬送患者に関して当院は“断らない救急”を意識した患者受け入れを心掛けています。現状は救急収容要請の約90%を受け入れて各診療科医師の協力のもとに救急科専門医による初期診療を行なっておりますが、さらなる受け入れ態勢の整備が今後の課題です。

そのひとつの試みとして、救急隊による院外活動と我々の院内活動の効率化を目指し、“山形救急医療情報共有システム”と称して、近隣村山地域の医療機関とともにデジタルツールの利用を推進しており、アプリを利用した患者情報共有システムを試行中です。（図1）システム導入前の救急隊の現場滞在時間は平均9分でしたが、システム導入による救急隊と医療機関との円滑な情報共有によるさらなる時間短縮を見込んでいます。また、アプリの導入により、画像の添付機能による受傷機転の把握や心電図などを含めた患者情報の評価が可能となり、より適切な搬送先選定を行えることなどのメリットがあります。

さらに、業務効率化という観点からは救急隊は光学文字認識機能や音声入力機能を利用した情報収集・登録が可能で、それらの情報はQRコードを用いて院内カルテとのオフライン連携が可能となっています。病歴・既往、常用薬等の情報が容易に院内カルテに反映され院内での初療の効率化に寄与することが見込まれます。

以上のような活動を通して、さらなる円滑な救急診療を目指しております。我々は、診ます会の先生方のお役に立てるように心掛けて参りますので、今後ともご支援をよろしくお願いいたします。

図1 緊急医療情報共有システムタブレット画面

【 発行 】**診ます会事務局**
〒990-8533
山形市七日町1-3-26 山形市立病院済生館 地域医療連携室
TEL 023-625-5555（代表） E-Mail renkeishitu@saiseikan.jp